

中年期女性の親子関係

——サンドイッチ世代の2つの親子関係のための尺度開発——

久 和 佐枝子¹ 梁 明 玉¹

中年期女性の持つ2つの親子関係（母親との関係と、長子との関係）について、同時分析が可能となる尺度の作成を試みた。3つの既存の親子関係尺度を参考に、サポートに関わる項目を中心とした15項目を選定して質問紙を作成、317人の中年期女性（45～64歳）から回答を得た。共分散構造分析によって因子構造モデルを分析したところ、2つの親子関係双方において「見守り」「サポートを与える」「サポートを求める」の3因子モデルが支持された。これにより、2つの親子関係はほぼ同じ因子構造を持つことが確認され、変数化した際にはダイレクトな比較が可能であることが分かった。

【目 的】

中年期（45～64歳）は、比較的安定した、生産的な時期であるとみなされやすいが、危機に結びつくイベントも数多く存在する。中年期の女性にとっては、子どもの成長に伴って、進学・就職・結婚といったライフイベントがあり、子どもとの関係が劇的に変化する時期である。また、高齢になった親への援助・介護など、親との関係も変化を迎える。上下2つの親子関係いずれの変化も著しい時期である。

中年期には、自分と両親の関係（子どもの立場）と、自分と子どもとの関係（親の立場）という、上下2つの親子関係がある。このため、この世代はサンドイッチ世代と呼ばれている。サンドイッチ世代とは、大久保・杉山（2000）によれば、「親世代と子世代の間に挟まれた世代、すなわち、子であると同時に親でもあるという人生の時期（中年期）にいる人々を指す言葉である」。そして、親世代と子世代「両方の世代から、同時に経済的・サービスの援助を求められる世代のこと」でもある。この世代の出現には、人口学的条件（親になる年齢<親を亡くす年齢）、経済学的条件（両世代からの要求に応えられるだけの経済力）、文化的条件（援助要求とそれへの応答が当たり前とされるイデオロギーの存在）の3条件が揃うことが必要であるとされる。サンドイッチ世代については家族社会学の領域での研究が行われているが、心理学的な研究は十分にな

されているとは言えず、2つの親子関係を同時に扱った研究はない。

これまでの研究で中年期の親子関係を扱う場合は、上下2つの親子関係のどちらか片方に着目するケースが多い。中年期の子どもと高齢の親との関係は、「老いては子に従え」の言葉どおり、親子の立場が逆転し、中年期の子どもが指導的立場をとり、高齢の親が依存的になるという説が有力だったが、近年は、親子はどこまで行っても親子であり、そうした立場の逆転は起こりにくいことが分かっている（Fingerman, 2001）。しかし、高齢の親は、特に80歳以上の超高齢世代である場合は、健康状態や経済状態から、中年世代の子どもからのサポートを必要とするケースが多い。そのサポート提供がスムーズに行われるか否かが、高齢の親の心理的健康度を左右し、ひいては中年の子どもと高齢の親との関係にも影響を及ぼすと考えられる。従って、中年期の子どもと高齢の親の親子関係は、高齢世代の親に提供されるケアを扱う調査の中で論じられることが多い。例えば、Pyke(1999)は、高齢者へのケアにおいては、成人した子どもの孝行心だけではなく、高齢の親が提供されたケアに対して十分な見返りをすることも、成人の子どもからのケアを促進する重要な要因となっていることを示唆した。Shuey & Hardy（2003）は、高齢の親に対する、中年夫婦のケアのあり方について調査し、ケアの提供が、「ケアの内容」、「ケアを受ける側の人物」、「高齢の親の生き方」の3要因によって規定されることを見出した。さらに、中

キーワード：サンドイッチ世代、中年期女性、2つの親子関係、SEM

1 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

年夫婦は、妻の親のニーズには対応が良く、親子間に葛藤があつてさえケアが継続されることを見出しており、中年期の女性とその生家との結びつきの強さを示唆した。Glaser & Tomassini (2002) は、高齢女性(60-74歳)とその成人の子どもの緊密性を英国とイタリアとで比較し、英国では高齢女性側のニーズが、イタリアでは成人の子ども側のニーズが、それぞれ両者の緊密性の決定要因として強いインパクトを持っていることを見出した。これらの結果から、中年期の子どもと高齢の親との関係は、両方の側に影響要因が存在し、それはケアやサポートの互惠性に関連しているものであることが分かる。従って、中年期の子どもと高齢の親との関係は、サポートの授受に焦点が置かれることが推測される。また、Koropecjy-Cox(2002)は、子どもを持たない中年期の子どもと、その高齢の親との関係について調べ、質の良い親子関係が、高齢の親の孤独感や抑うつ感を低下させ、安心感を与えていることを見出した。同時に、女性のアイデンティティにおける母性重視が、高齢の母親と中年世代の女性のwell-beingを低下させることも明らかにした。この結果は、中年期の親子関係が、中年世代、高齢世代双方の心理的健康度に大きく関係していることを示している。

一方、中年期の親とその子どもについては、親の年齢(45~64歳)から、子どもが青年期・成人期であることが想定される。青年期・成人期の子どもを持つ親は、思春期を迎え心理的成長著しい子どもへの対応に追われたり、あるいは進学や就職で離家・独立する子どもを見送ったりといった、子どもの発達に沿って変化の激しい時期を経験するだろう。子どもの巣立ちを迎えた中年女性のアイデンティティについて調査した清水(2004)は、第一子の巣立ちへの認識が母親のアイデンティティ発達を促進させることを確認しており、子どもの独立が中年女性に心理的な影響を及ぼすことを明らかにした。また、若原(2003)は、大学生を対象にして、青年期の子どもの親への態度を、愛情と力という2つの次元を用いた類型化理論に基づいて調べたところ、青年期の子どもには「母親を愛し力を感じる傾向」が認められた。このように、青年期の子どもと中年の親の間にも、心理的に重要な変化や特徴があることが分かる。

青年期の子どもと中年の親の関係においても、中年の子どもと高齢の親の関係と同様、サポートの授受というのは大きな要因である。ただし、子どもが青年期の場合は、親から子への一方的な援助が目立つ。宮本

(2000)は、日本の親の特徴として、「子どもに対する物的援助を惜しまないという点」を挙げ、「子どもが二十歳を超えて以降も長期間、親からの援助と保護を受け続け、責任や義務を要求されなくなった」と述べている。しかし、これは現象的なものであつて、岩上(1997)が述べているように、青年の親は、自立した生活を営める子どもに対しても援助を惜しまないが、これについては、将来的な介護のための投資であるという解釈が成り立つ。つまり、何十年後かの未来にリターンがあることを期待しての、現時点での一方的なサポート提供と考えられるのである。その意味では、やはりサポートは双方向において存在するものである。青年期の子どもが受けるサポートには、経済的・物理的援助だけではなく、精神的なものも含まれている。例えば、和田(1992)は、ソーシャルサポートの観点から、大学新生は両親から「情緒的」「気楽さ」「道具的」という3種類のサポートを得ているという結果を得、これが大学新生の心理的幸福感にポジティブに寄与し、特に孤独感の緩和に有効であることを明らかにしている。また、嶋(1991)は、大学生を対象に、様々な人的ソーシャルサポート源の特徴を調べ、ソーシャルサポートという観点においては、父親の持つ役割は極めて小さく、一方、母親のサポート機能は家族成員の中で最も高いことを示した。これらの研究からは、親からの心理的サポートは有効であり、また、「母親」の果たす役割が大きいことが推測される。従って、青年期の子どもと中年期の親、特に母親との間の親子関係においても、物心両面のサポートというのは重要な位置づけをなされる要因であると考えることができる。

以上のことから、中年女性の持つ2つの親子関係は、サポートという要因が大きく影響するものであるという点で共通しており、サポートという観点からは同様の関係性を持つものであると考えられる。従って、2つの親子関係は、同一の尺度で測定されるものであり、その構造は同一であると仮定できる。

本研究では、上記の仮定により、「中年女性の持つ2つの親子関係は、対応する項目で構成された2つのバージョン(親との関係用と、子どもとの関係用)を持つ尺度で測定でき、その2つの親子関係の構造は同じである」という仮説を立てた。そして、この仮説に基づき、2つの親子関係を測定するために、相互に対応する2つのバージョンを持つ尺度開発を試みた。そして、その構造が同じであるという仮説を、共分散構造分析(SEM)で確認することを目的とした。

【方法】

①被験者：関東地方のO市に在住する45～64歳の女性317人。二段無作為抽出法により選出した1800人に対し、自記式調査票を郵送で配布したところ、884人から回答を得た。そのうち、母親についての質問と、長子についての質問の双方に対し完全な回答を寄せた321人のうち、長子が10歳以下の4名を削除し、317人を分析対象とした。これは、質問紙構成に当たって、子どもの年齢を11歳以上と想定したためである。11歳以上（小学6年生以上）という年齢設定は、子ども側からのサポートが可能であり、また、中年女性の側からサポートを求めることが可能であること、という条件に基づいてなされた。

被験者自身の平均年齢は52.27歳であり、職業を持っているのは65.6%であった。学歴は、高校卒業程度が54.9%と最も多く、中卒が9.5%、短大卒業程度が19.6%、大学卒業以上は14.2%であった（その他無回答が1.8%）。被験者の長子については、平均年齢は25.46歳（11～41歳）、20歳未満の割合は18.3%で、長子の大半は成人していた。男女比は、女子が48.25%、男子が51.75%となっていて、ほぼ1：1であった。職業に就いているのは56.2%であり、未婚者が74.1%、被験者と同居しているのは55.5%、被験者と毎日交流がある（電話やメールといった間接触を含む）のは58.0%であった。一方、被験者の母親の平均年齢は79.85歳（65～99歳）であった。被験者と同居している割合は13.2%、被験者と母親との交流頻度（電話やメールといった間接触を含む）は、週に1回以上の交流があると答えた割合が43.5%であった。

②調査期間：2003年11月から2004年2月であった。

③質問紙：中年女性の持つ親子関係は、サポート要因に大きく影響される、という仮説のもと、項目の設定が行われた。参照した尺度は3つである。ベースとしたのは谷井・上地（1993）の親役割診断尺度であり、これを元に中年期の親子関係に相応しい領域を選定し、それに合致した項目をParent-Child Relationship Questionnaire(Furman, 1991)から選び、その邦訳に際して、佐藤・落合（1996）で使用された親子関係尺度の表現を参照した。

親役割診断尺度（谷井・上地，1993）は、中高生の子どもを持つ親に、自分の親役割について自己評価を求める尺度である。被験者である親の年代は中年期であり、これは本研究における被験者層と重なるもので

ある。この尺度から、サポートに関する項目を中心に、中年期の子どもと高齢の親の間の親子関係にも適合する領域として「適応援助（サポート授受）」、「干渉」、「受容」の3領域が選び出した。これに基づいて、Furman（1991）のParent-Child Relationship Questionnaire(以下PCRQ)から4領域（Possessiveness＝干渉/Warmth＝受容/Disciplinary Warmth＝適応援助（サポート受）/Personal Relationship＝適応援助（サポート授））・14項目を選定した（Table 1）。PCRQは、小学校4年生から6年生までの児童とその親を対象とした質問紙であり、子どもバージョンと、親バージョンがある。この2つのバージョンはそれぞれ対応する57項目から成り、5因子構造が確認されていて、さらに19の下位領域に分けられる。PCRQは親子それぞれに対して質問しているが、サンドイッチ世代は自分をはさんで上下に親子関係を持つことから、親・子の立場を変えることにより、一人で両方のバージョンに回答することができる。続いて、このPCRQで選んだ項目の邦訳に際し、落合・佐藤（1996）で使用された親子関係について尋ねる質問項目を参照した。これは、青年の心理的離乳の観点から、親子関係を5段階に分類しており、それぞれの段階について測定を試みた尺度である（以下、5段階スケールと呼称する）。5段階スケールは中学生～大学院生に対して実施され、母親との関係、父親との関係についてそれぞれデータをとり、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を用いて分析されている。今回は、母親との関係について得られた結果を参考にし、内容的に対応する項目を選んだ（Table 2）。PCRQにおいて同一因子に寄与すると仮定される項目は、5段階スケールにおいても同一因子に寄与するように心がけた。具体的な項目内容は、各項目とPCRQおよび5段階スケールとの対応とともに、Table 3-1に長子バージョンを、Table 3-2に母親バージョンを示した。PCRQの場合は4因子構造となるが、5段階スケールの場合は3因子構造となることが想定される。

14項目の文章表現については、上記のとおり、5段階スケールをベースとしているが、親としての立場と子としての立場それぞれから回答を求めるため、表現がそれぞれの親子関係に相応しいものになるよう多少修正を加えた。

回答は、「1. よく当てはまる」～「5. 全然あてはまらない」の5件法で求めた。分析に際しては、回答の方向と数値の大きさが一致するように数値を変換した。

Table 1. PCRQ (PARENT VERSION) において選択された項目リスト

PCRQ 項目番号	項目内容
40 (PO)	How much do you worry about this child when he or she is not at home ?
21 (PO)	How much do you not let this child do something he or she wants to do because you are afraid he or she might get hurt ?
39 (PO)	How much do you want this child to be around you all the time ?
2 (PO)	How much do you not let this child go places because you are afraid something will happen to him or her ?
30 (W)	How much do you feel proud of this child ?
49 (W)	How much do you think highly of this child ?
3 (W)	How much do you and this child care about each other ?
11 (W)	How much do you admire and respect this child ?
33 (PR)	How much do you help this child with things he or she can't do by him -or herself ?
24 (PR)	How much do you and this child give each other a hand with things ?
43 (PR)	How much do you and this child do special favors for each other ?
35 (DW)	How much do you listen to this child's ideas before making a decision ?
16 (DW)	How much do you ask this child for his or her opinion on things ?
54 (DW)	How much do you respect this child's opinion ?

※ 1 : 項目番号の後ろの () 内のアルファベットは、各項目が寄与する因子を示す。因子内容は以下のとおりである。PO : Possessiveness、W : Warmth、PR : Personal Relationship、DW : Disciplinary Warmth。

※ 2 : 項目内容は、parent versionにある表現を掲載した。Child versionでは、上記項目文章中の“this child”が、“this parent”に変わる。また、項目43は、前半の文章を省略した。

Table 2. 5段階スケール (母親との関係版) より選択された項目リスト

項目NO	項目内容
A12(1)	母親は、干渉はしないが、いつも私のことを気にかけている
A13(1)	母親は、私の考えを尊重し、自分の意見を押し付けることはない
A03(1)	母親は、陰から私をそっと見守っている
A09(1)	母親は、子どものことを信じているのであまり口うるさくない
Z11(1)	母親とは、お互いに個人として尊敬しあう仲である
Z12(1)	母親も私も、それぞれの立場を互いに理解しようとしている
A05(5)	私が困ったときに、母親は心の支えになってくれる
C01(3)	母親は、私が何をしてもお構いなしである
C03(3)	母親は、私にあまり関心をもっていない
H03(5)	母親は、私が解決できないことをすぐ解決してくれる
I03(5)	私が困ったときに、母親はいろいろと助けてくれる
A08(1)	母親は、子の幸せは親の幸せだと言って、私を見守ってくれている
Z15(4)	母親の後ろ姿を見て、いとおしさをおぼえることがある
Z18(4)	母親は、迷ったときには、私の考えを参考にしようとする
Z17(4)	母親は、わからないことがあると私に聞いてくる
Z03(4)	母親は、私に相談をもちかけてくることがある

※ 1 : 項目NOのアルファベットは、心理的離乳への5段階過程仮説に基づいた分類であり、内容は以下のとおりである。H : 第1段階「子を抱え込む親との関係」、I : 第2段階「子を守る親との関係・子を危険や害から守る親との関係」、A : 第3段階「子の成長を念じる親との関係」、C : 第4段階「子と手を切る親との関係」、Z : 第5段階「対等な親子関係」。アルファベットの次の数字は、その分類内での項目番号を示す。

※ 2 : 項目NOの () 内の数字は、落合・佐藤 (1996) の因子分析の結果に基づいた分類である。Table 2内の各因子は次のとおり。第1因子(1)「子が親から信頼・承認されている親子関係」、第3因子(3)「親が子と手を切る親子関係」、第4因子(4)「親が子を頼りにする親子関係」、第5因子(5)「子が困ったときには親が支援する親子関係」。

Table 3-1. 質問項目内容と、変数名および各尺度との対応、寄与因子

長子との関係バージョン				
項目内容	変数名	PCRQ の分類	5段階スケールの 分類	SEMの結果 (因子)
干渉はしないが、いつも子どものことを気にかけている	v 294	40(PO) 心配する	A12(1) 気にかける	FC1
子どもの考えを尊重し、自分の意見を押し付けないようにしている	v 282	21(PO) r 考えをおし つける	A13(1) 考えを尊重する	FC1
陰から子どもをそっと見守っている	v 281	39(PO)r 傍にいてほ しい	A03(1) 陰から見守る	FC1
子どもと言い争うことが多い (反転項目)	v 283	2(PO) 禁止する	A09(1) 言い争う	-
お互いに個人として尊敬しあう仲である	v 288	30(W) 尊敬する	Z11(1) 尊敬しあう	FC1
それぞれの立場をお互いに理解しようとしている	v 287	49(W) 考えを尊重 する	Z12(1) 立場を理解する	FC1
困ったときに、子どもはいろいろと助けてくれる	v 291	3(W) 世話する	A05(5) 助けてくれる	-
子どもの行動に無関心である (反転項目)	v 285	11(W) r 大切にす	C01+C03(3) 無関心	-
子どもが解決できないことは、私が解決する	v 293	33(PR) 解決する	H03(5) 解決する	FC2
子どもが困ったときに、いろいろと助ける	v 295	24(PR) 手助けする	I 03(5) 助ける	FC2
子の幸せは親の幸せだと思うので子どもを見守ってあげたい	v 292	43(PR) 頼みをきく	A08(1) 見守りたい	FC2
迷ったときには子どもの考えを参考にする	v 289	35(DW) 考えをきく	Z18(4) 参考にする	FC3
わからないことがあると子どもにきく	v 286	16(DW) 意見を求め る	Z17(4) きく	FC3
子どもに相談をもちかけることがある	v 290	54(DW) 意見を尊重 する	Z03(4) 相談する	FC3

※1: 「PCRQ」と「5段階スケール」については、項目内容を端的に示す略語を掲載した。具体的内容についてはTable 1とTable 2を参照。“r”がついている項目は、本調査の質問紙では表現を逆転させ、回答の方向を反転させたことを示す。

※2: 「SEMの結果」欄は、本研究における分析結果を示す (Figure 1とFigure 2参照)。各因子名は以下のとおり。FM1は「母親への見守り」、FM2は「母親にサポートを与える」、FM3は「母親にサポートを求める」。FC1は「長子への見守り」、FC2は「長子にサポートを与える」、FC3は「長子にサポートを求める」。“-”は、共通性が0.3以下のために分析から除外されたことを示す。

Table 3-2. 質問項目内容と、変数名および各尺度との対応、寄与因子

母親との関係バージョン				
項目内容	変数名	PCRQ の分類	5段階スケールの 分類	SEMの結果 (因子)
干渉はしないが、いつも母親のことを気にかけている	v 323	40(PO) 心配する	A12(1) 気にかける	FM1
母親の考えを尊重し、自分の意見を押し付けないようにしている	v 325	21(PO) r 考えをおし つける	A13(1) 考えを尊重する	FM1
陰から母親をそっと見守っている	v 332	39(PO)r 傍にいてほ しい	A03(1) 陰から見守る	FM1
母親と言い争うことが多い(反転項目)	v 326	2(PO) 禁止する	A09(1) 言い争う	-
母親とは、お互いに個人として尊敬しあう仲である	v 329	30(W) 尊敬する	Z11(1) 尊敬しあう	FM1
母親も私も、それぞれの立場をお互いに理解しようとしている	v 330	49(W) 考えを尊重 する	Z12(1) 立場を理解する	FM1
母親が困ったときには、私が心の支えになる	v 327	3(W) 世話する	A05(5) 心の支えになる	FM2
母親の行動に無関心である(反転項目)	v 334	11(W) r 大切にす	C01+C03(3) 無関心	-
母親が解決できないことは、私が解決する	v 328	33(PR) 解決する	H03(5) 解決する	FM2
母親が困ったときに、いろいろと助ける	v 331	24(PR) 手助けする	I 03(5) 助ける	FM2
母親の後ろ姿を見て、いとおしさをおぼえることがある	v 336	43(PR) 頼みをきく	Z15(4) いとおしい	-
迷ったときには母親の考えを参考にする	v 324	35(DW) 考えをきく	Z18(4) 参考にする	FM3
わからないことがあるときは、母親にきく	v 335	16(DW) 意見を求め る	Z17(4) きく	FM3
母親に相談をもちかけることがある	v 333	54(DW) 意見を尊重 する	Z03 (4) 相談する	FM3

※1: 「PCRQ」と「5段階スケール」については、項目内容を端的に示す略語を掲載した。具体的内容についてはTable 1とTable 2を参照。“r”がついている項目は、本調査の質問紙では表現を逆転させ、回答の方向を反転させたことを示す。

※2: 「SEMの結果」欄は、本研究における分析結果を示す (Figure 1とFigure 2参照)。各因子名は以下のとおり。FM1は「母親への見守り」、FM2は「母親にサポートを与える」、FM3は「母親にサポートを求める」。FC1は「長子への見守り」、FC2は「長子にサポートを与える」、FC3は「長子にサポートを求める」。“-”は、共通性が0.3以下のために分析から除外されたことを示す。

【結果】

親子関係尺度は、長子との関係バージョンと、母親との関係バージョンを別個に分析した。観測変数間の相関係数はTable 4に長子との関係バージョン、Table 5に母親との関係バージョンの結果をそれぞれ示した。まず、SEM (AMOS4)により、PCRQに従った4因子構造を設定して適合度指標を算出した。その結果は、母親との関係バージョンがGFI=0.83、AGFI=0.74、長子との関係バージョンがGFI=0.89、AGFI=0.83であり、データがモデルを十分には支持しなかった。そこで、次に、探索的因子分析にかけた（主因子法、プロマックス回転・SPSSver11.5使用）。共通性が0.3以下の項目を削除して、再度因子分析を行い、その結果、長子との関係バージョンにおいて3因子を抽出した。これが、Figure 1に示されたFC1、FC2、FC3、である。これらの因子には、落合・佐藤 (1994) の5段階スケールの因子分析において同一の因子に寄与するとされた項目がほぼ集まっていた。そこで、Figure 1のモデルをSEMで分析したところ、GFI=0.90、AGFI=0.84という値を得、データがモデルを支持した。母親との関係バージョンについても、長子との関係バージョンと同じ因子構造を仮定し、SEMにより分析した。こちら

Table 4. 長子との関係バージョンの変数間相関係数

	v281	v282	v283	v285	v286	v287	v288
v281	1.000						
v282	0.496	1.000					
v283	-0.088	-0.301	1.000				
v285	-0.019	-0.045	0.039	1.000			
v286	0.067	0.130	0.045	-0.141	1.000		
v287	0.227	0.342	-0.171	-0.191	0.290	1.000	
v288	0.248	0.396	-0.212	-0.076	0.225	0.560	1.000
v289	0.150	0.158	0.049	-0.109	0.542	0.302	0.247
v290	0.053	0.119	0.133	-0.093	0.517	0.169	0.255
v291	0.116	0.145	0.037	-0.115	0.480	0.349	0.305
v292	0.281	0.194	-0.061	-0.182	0.260	0.281	0.242
v293	0.014	-0.069	0.144	-0.069	0.185	0.135	0.108
v294	0.359	0.419	-0.146	-0.069	0.145	0.322	0.337
v295	0.162	0.053	0.077	-0.143	0.162	0.215	0.131

	v289	v290	v291	v292	v293	v294	v295
v281							
v282							
v283							
v285							
v286							
v287							
v288							
v289	1.000						
v290	0.660	1.000					
v291	0.431	0.492	1.000				
v292	0.206	0.231	0.398	1.000			
v293	0.211	0.289	0.227	0.241	1.000		
v294	0.160	0.070	0.229	0.376	0.173	1.000	
v295	0.227	0.165	0.322	0.383	0.420	0.371	1.000

Table 5. 母親との関係バージョンの変数間相関係数

	v323	v324	v325	v326	v327	v328	v329
v323	1.000						
v324	0.344	1.000					
v325	0.317	0.475	1.000				
v326	-0.244	-0.126	-0.205	1.000			
v327	0.337	0.320	0.283	-0.051	1.000		
v328	0.153	0.142	0.203	0.191	0.607	1.000	
v329	0.277	0.455	0.440	-0.258	0.442	0.298	1.000
v330	0.335	0.517	0.514	-0.216	0.414	0.210	0.668
v331	0.305	0.196	0.173	0.028	0.722	0.605	0.367
v332	0.476	0.312	0.305	-0.128	0.311	0.156	0.364
v333	0.227	0.635	0.326	-0.028	0.248	0.117	0.396
v334	-0.297	-0.227	-0.109	0.088	-0.274	-0.173	-0.262
v335	0.255	0.712	0.360	-0.096	0.233	0.066	0.466
v336	0.414	0.306	0.157	-0.135	0.337	0.193	0.335

	v330	v331	v332	v333	v334	v335	v336
v323							
v324							
v325							
v326							
v327							
v328							
v329							
v330	1.000						
v331	0.257	1.000					
v332	0.373	0.355	1.000				
v333	0.446	0.227	0.324	1.000			
v334	-0.252	-0.264	-0.263	-0.197	1.000		
v335	0.512	0.175	0.289	0.741	-0.205	1.000	
v336	0.339	0.314	0.352	0.268	-0.310	0.323	1.000

は、第II因子「FM2」において、「v336：頼みをきく」ではなく「v327：心を支える」を因子項目とすることによって解が安定した。適合度指標は、GFI=0.92、

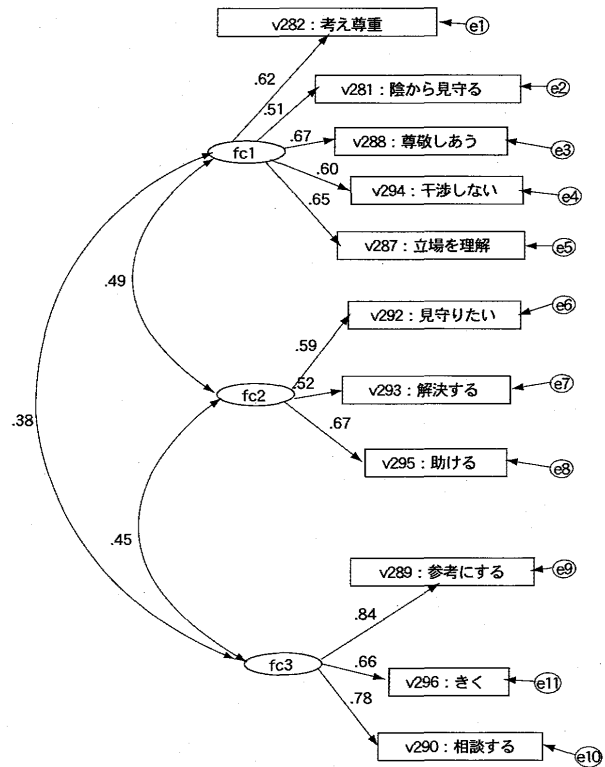


Figure 1. Factor Analysis of Relation with the first child (Refer to Table 3 about variables and factors)

AGFI=0.87という値を得、モデルの適合度の高さが示された (Figure 2)。

それぞれの因子を構成する項目から、因子名をそれぞれ、FC1とFM1=見守り、FC2とFM2=サポートを与える、FC3とFM3=サポートを求める、とした。

各因子の内容を見てみると、「見守り」を示すFM1とFC1は、寄与する項目が2つのバージョン間で完全に対応していた (Table 1参照)。この因子は、PCRQにおける2つの因子、PossessivenessとWarmthに属する項目が集まって構成されており、5段階スケールにおいては、「第1因子」を構成する項目 (AとZ) と一致していた。また、「サポートを求める」FM3とFC3も、寄与する項目の内容が2つのバージョン間で完全に対応しており、これはPCRQのDisciplinary Warmthと完全に一致し、5段階スケールにおいては「第4因子」に対応していた。一方、「サポートを与える」FM2とFC2は、母親との関係バージョンにおいて、Personal RelationshipとWarmthから項目が集まり、長子との関係バージョンではPersonal Relationshipに属する項目のみで構成されていた。従って、バージョン間で1項目が不一致という結果であったが、他2項目は対応するものが集まっており、ほぼ同じ内容の因子が抽出されたと判断できた。これは、5段階スケールにお

いて「第5因子」に属する項目と対応していた。以上より、2つの親子関係は3因子構造が支持され、これは5段階スケールに従うものであった。また、2つの親子関係は、ほぼ同じ因子構造を持つことが確認された。

【考察】

質問紙構成の段階では、PCRQの4因子あるいは5段階スケールの3因子が抽出されることを想定していたが、因子分析の結果、およびSEMによる分析結果は3因子構造を支持した。PCRQにおけるPossessivenessとWarmthが分離せず、1つの因子を構成したことが、3因子構造となった原因である。これらの項目は、5段階スケールにおいては同一因子を構成している。結果として、SEMは5段階スケールの結果を支持したわけだが、その理由としては2つが考えられる。1つ目は、被験者の特徴の違いである。PCRQは小学生とその親を被験者としていたが、5段階スケールは中学生以上大学院生までの子どもを対象としていた。本研究の調査対象者の長子は11歳以上であり、8割以上が成人していたことから、被験者の特徴は5段階スケールにおける被験者との類似が高いと考えられる。しかし、PCRQと5段階スケールの因子間の対応が、本研究の調査から十分確認されることから、FC1・FM1については、児童期には2つの領域に分けられるものが、青年期の親子関係においては1つに統合されるという解釈も成り立つ。

2つ目の原因としては、邦訳の影響が考えられる。PCRQの項目内容は邦訳の過程で5段階スケールの表現に置き換えられた。このことが、5段階スケールの優位性につながった可能性は否めない。PCRQを忠実に訳した場合、あるいはオリジナルを用いて英語圏で調査を行った場合、4因子構造が支持される可能性がある。

因子構造のバージョン間の対応については、2つの親子関係についてそれぞれ3因子を想定し、ほぼ同一の項目を集めたモデルは十分な適合度指標の値を持ったことから、その構造がほぼ同じであることが示された。特に「サポートを求める」因子FC3とFM3は、その寄与する項目が、PCRQのDisciplinary Warmthと完全に重なっていた。また、長子との関係・母親との関係双方とも完全に対応する項目どうしが寄与していた。従って、これらは同一の内容を示す因子であると考えることができ、変数化した際にはダイレクトな比

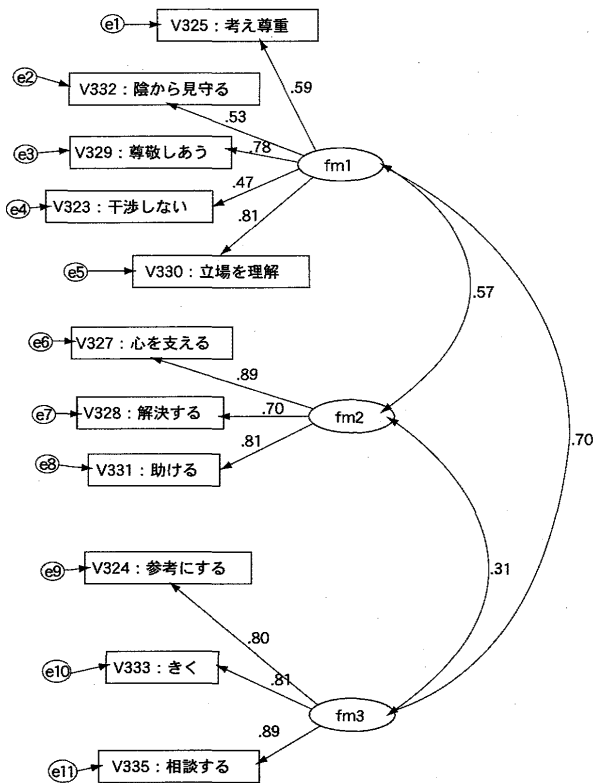


Figure 2. Factor Analysis of Relation with Mother (Refer to Table 1 about variables and factors)

較検討が可能であろう。また、この「サポートを求める」因子に寄与する項目は、5段階スケールにおいては第4因子に寄与する項目に含まれている。この第4因子は、「親が子を頼りにする親子関係」の因子と名づけられており、これは、本研究の「サポートを求める」因子の内容と矛盾しない。また、「見守り」と名付けたFC1とFM1も、項目同士は完全に対応していた。PCRQではPossessivenessとWarmthの2領域に分かれているが、この2領域が1つの因子に集まったことから、この因子が示すものは、「温かみを伴う干渉」、つまり「相手への尊重を持った関わり」といった内容であると推測されよう。5段階スケールでは、これらの項目はすべて第1因子に含まれており、「子が親から信頼・承認されている親子関係」を意味する。従って、これらが同じものを意味する因子であることが示された。一方、「サポートを与える」因子であるFC2とFM2については、1項目の不一致が見られた。FC2についてはPCRQでは3項目ともPersonal Relationshipに分類されている。FM2は、3項目中2項目についてはPCRQのPersonal Relationshipに含まれるが、残り1項目はWarmthの項目であった。5段階スケールでは、FC2は3項目が第5因子に含まれていたものの、FM2は2項目が第5因子に属し、残り1項目は第1因子に寄与するものであった。しかし、この第5因子に関する「その項目の内容には、『子どもである青年が困ったとき助けてくれる、教えてくれる、励ましてくれる』といった一貫性が見られる」という説明は、FC2・FM2に当てはまるものである。従って、FC2・FM2は、PCRQのPersonal Relationship、および5段階スケールの第5因子「子が困った時には親が支援する親子関係」の因子に相当するものであると結論付けることができる。以上から、本調査で開発された尺度の理論的整合性が確認された。また、同時に、尺度開発で使用されたPCRQと5段階スケール、両尺度の頑健性も示された。

今後の研究としては、中年女性と父親の関係や、中年男性の親子関係についての調査を行い、今回の結果と合わせて中年期全体の親子関係を明らかにすることが求められる。また、本調査は、因子構造の分析と解釈にとどまっているが、これを変数化した場合、どのような人口統計学的要因の影響があるかを調べ、その特徴を明らかにすべきである。さらに、うつ尺度・不安尺度といった心理学的変数を導入して心理的幸福感との関連を見る研究も、中年期の危機がささやかれる昨今、有用な知見をもたらすに違いない。これらの研

究により、サンドイッチ世代について、より深い理解を得ることが期待される。

【引用文献】

- Fingerman, K. L. (2001). *Aging Mothers and Their Adult Daughters*. Canada: Springer Publishing Company.
- Furman, W. (1991). Parent-Child Relationship Questionnaire (PCRQ). In Perlmutter, B. F., Touliatos, J., Holden, G. W. (2001), *Handbook of FAMILY MEASUREMENT TECHNIQUES Instruments & Index* (pp285-289). Sage.
- Glaser, K. & Tomassini, C. (2002). Proximity of Older Women to Their Children: A Comparison of Britain and Italy. *The Gerontologist*, 40, 6, 729-737.
- 岩上真珠. (1997). 第5章：扶養と介護は誰が？ 仲良し親子の将来像. 宮本みち子, 岩上真珠, 山田昌弘, *未婚化社会の親子関係：お金と愛情にみる家族のゆくえ* (131-166). 東京：有斐閣選書.
- Koropecj-Cox, T. (2002). Beyond Personal status: Psychological Well-Being in Middle and Old Age. *Journal of Marriage and the Family*, 64, 957-971.
- 宮本みち子. (2000). 第8章：少子・未婚社会の親子. 藤崎宏子 (編), *親と子：交差するライフコース* (pp211~225). 東京：ミネルヴァ書房.
- 大久保孝治・杉山圭子. (2000). 第9章：サンドイッチ世代の困難. 藤崎宏子 (編), *親と子：交差するライフコース* (pp211~225). 東京：ミネルヴァ書房.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. *教育心理学研究*, 44, 1, 11-22.
- Pyke, K. (1999). The Micropolitics of Care in Relationships Between Aging Parents and Adult Children: Individualism, Collectivism, and Power. *Journal of Marriage and the Family*, 61, 661-672.
- 嶋信宏. (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究. *教育心理学研究*, 39, 4, 440-447.
- 清水紀子. (2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ. *発達心理学研究*, 15, 1, 52-64.

Shuey, K. & Hardy, M, A. (2003). Assistance of Aging Parents and Parents-In-Law: Does Lineage Affect Allocation Decisions ? *Journal of Marriage and family*, 65, 418-431.

谷井・上地 (1993). 親役割診断尺度. 堀洋道監修、吉田富二雄編(2001), *心理測定尺度集II 人間と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観>* (pp153~158). 東京:サイエンス社.

若原まどか. (2003). 青年が認識する親への愛情や尊敬と、同一視および充実感との関連. *発達心理学研究*, 14, 1, 39-50.

和田実. (1992). 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響. *教育心理学研究*, 40, 4, 386-393.

【付 記】

本稿は、お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」プロジェクトIV「中年女性の生活キャリアと危機的移行」による調査の一部である。